の啓発を目的としているにも関わらず，逆に，住民を油断させる側に作用してしまったのではないかと危惧しているところである（写真 23 ～写真 30）.

5．学校における今後の津波防災対策

津波被災地域において小学校や中学校の校舎は，多くの場合，避難場所として期待されている．しかし事前に何の申し合わせもなく，いきなり被災者が学校に押し寄せるような場合を想像してみると，学校側ではどのように対応したら良いのか，相当に困難な問題が発生するのではないだろうか．そもそも，学校自体が津波災害に対して安全な場所なのかどうか，津波防災の専門家でもない学校の教職員に，その重要な判断を委ねること自体に根本的な問題はないだろうか．実際，東日本大震災での事例を調べてみると，結果的に避難行動がうまくできた学校とそうでなかった学校とでは，社会からの評価に大きな違いが現われているようである．しかし本当にそれで良いのだろうか．実は，避難行動がうまくできた学校とそうでなかった学校との間にはそれほど大きな違いはなく，その差は紙一重だったのではないだろうか．例えば，仙台市立荒浜小学校，山元町立中浜小学校，南三陸町立戸倉小学校，石巻市立大川小学校の事例に注目してみたい．荒浜小学校では多くの児童や近隣の被災者が学校に避難して助かったが，もし小学校に留まらず内陸に向かって避難していたらどうなっていただろうか．中浜小学校の場合には全員が学校に籠城し，戸倉小学校の場合には近くの高台に集団避難して共に事なきを得たが，もし津波があと数メートル高かったらどうなっていただろうか．大川小学校や周辺の釜谷地区の人々はなぜ，裏山に避難せず，津波来襲の間際まで動かずに居たのだろうか．児童・生徒や地域の被災者を津波災害から守るためには，学校に立て籠もるべきか，さらに安全な場所に避難すべきなのか，到底一筋縄では行かない難問であるように思われ，今後，学校の津波対策を考える際には，これらの『もし』や『なぜ』に左右されない，真の防災対策・防災教育でなければならないと肝に銘じているところである．

特に地形が平坦で広大な仙台海岸平野においては，近くに避難できるような高台が存在しない場合が殆ど

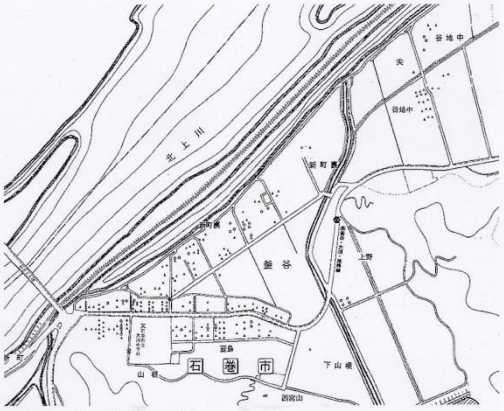

図 15 石巻市釜谷地区における住民・在勤者等の被災状況
（大川小学校事故検証委員会 [24] による）

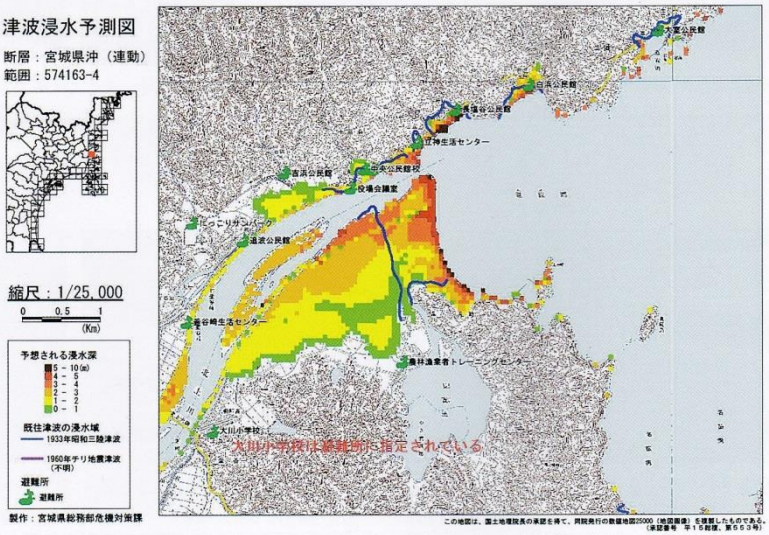

図 16 宮城県沖地震 (連動型) を想定した津波浸水予想図
（宮城県危機対策課 [25] による）